# 袖の中

片岡撰

911.3
ソ

内閣文庫

# 袖土産集

序

亀元坊

出羽の鶴の岡なる小窩者の
あるじ。けり石子五月中旬武江なる
むろんやしき頻よ一集ばかりひらこて
ちふる其所麦何士へ図こやけ
と乞ゆえ侍るとて拙き世ちひ予ら

東京都立中央図書館蔵書

行脚の杖を止めよと思ふそれ洲
崎の松さにとおりへふなり
うつてゝ家も能因のむかし我慕ひ
加賀の白山を見たる山野海岸の
日暮を忘れ陵の人くも無尽せはや
なおもおりひ所のうゝ潮こ紙を乃
源泉より頭を出るくく婦とも
牧路へ帰ふ山の旅行八番所
をかなるやうなる赤の松ゆこのなく
麦畑士の書音ゆ番越ゆ屋とを
却の花乃雪ゆ訪神侍ふをさん
ひ鶯塚の雄うまをりまふし
短孔の一奏とはなぬ亦所
是ゆ里袖の浦乃一章をおく里

く武城連中の風流をそこなはん
撰集は物者ともかくもてはこに
第里の情をそこひあて年交會の
情をよせく花橘の系統なつかしき
袖こやけとそよふ事ふかしも

享保七卯 仲夏日

紅歌行

庵之坊北越の行脚をすゝめ新潟
表をむかへ名菓の吟なと
涼くきふそめ味へられて

麦阿

卯の年は雪の越路乃初夜
裕の夜も今雲より鳥 庵之坊
ゆと涼は里へ寸庵花と菓も延く 片石
菓のこは名をへ萩乃折 美 李夕

[illegible]　十知

[illegible]　安榮

[illegible]　野秋

武義[illegible]　一[illegible]

[illegible]　白之

仕事の[illegible]　芦雖

[illegible]　北面

[illegible]

[illegible]　風艸

[illegible]　坊

男[illegible]　石

[illegible]　夕

[illegible]　知

[illegible]　榮

[illegible]　秋

蕎麦のかくれも月も掃ちきり　乎

神ちうろを繰よすと酒　之

止川のくもの河漕う麓細　雅

明るくやそ村鳥嘯　面

旅をすゑやうにかゆの花咲ひ　州

桃の下着よ蕎ちよりけり　執筆　魯子

かくしゐ自の未よ美流の
美鶴主人家う仕鶴う国ち
松仲よ俳の巣作人と呼ゑ
句を風仲今亭よ拾せう神
ゆゑと伸くかしとに動う
連京の方瑞う
ひそとなうう

雲あよ呼ば嘯や行やくまに　片石

私なうあゑるの旅主亭のちゑ
なりて笠よ蕎麦とひしめく
中よ氏素を思ひ主るようと風客
よかううみちうう古な巣立の恢よ

考妣の此所にとどまりて
此ひの首途祝霊前へ下ス

無くゝ也 紅日もありや門 勝 幽雪

初妻やつま木こうへる 宿の 松 妙空尼

旅 行

[illegible]五月の十八日小盆舎の墓場と
言一足より[illegible]此所[illegible]立出る
なとにあれり連俳[illegible]
あり

[illegible]
きく梵字川を
わたるとて

涼しさや矢立よ掛よ梵字川

清川村より[illegible]
のかるかるの[illegible]
亡友[illegible]を思ひ出

白糸の滝や[illegible]ハ走り 及肩

左右の山巌清て不くよ人里
あらもあくに[illegible]山寺の

いとはるかにてもほゝかうきゝ
作なるに空はきのふの面よ　やうんと
ゆくとけり

和尼もすいやの雪ゝ　蘇寺

日あをぎて杜下体と称く湯の系
といふ所より湯系此所迄十一
厲寒の地なれども筆ちすすと
角くむはうをなり

所のみよりのぼる峠迄　畠中

かゝをを過りよりおもしろきの沼り峰
あるもかゝまるにおりうのるをつまれハ

恵海ゝ　ゝ　彦の言さやかとゝきす

白河の関を越く芦毛に八日も
面のあきりなれと人馬の足とゝ
掘り都もをこよ見やりて

宗ゝ　ゝ　沢に行くゝ　柳うる

かはおりなる神を祈りの系もからゝて
通りぬさかゝするかとに十三日の驛
詩芭なく為ゝ　三月朔日武陵ゝ　芭蕉

先師ゝ　義つく汗も氷室の日

歌仙

雪の降く源し磯ち山　支考

くるき不ゐ嵯ゐんこ多　重行

山夏川あとの中ち音やきて　呂丸

傘一本よ四人の家　考

連羽織ち上のすゐ常　行

蘭柳の蔵くきちゐ

蔵し神賀名生の使ゐ

ちとれを撫れ

物藤の姉ゐ発ら神て

猫ち色ひをあくゑ

枳の自ひ別墅ち吹ち

沖ちくちち降ゐ

丸

考

行

丸

考

丸

考

ち

丸

会仕ふ味噌の恋も拵へ神に　考
まゐらするなる機の織物　り
門おの蹴もいまゝ定まゝす　九
月あかるを発ふ笠とりの沼　考
衣〳〵馬上よ賦を花ちり　り
思髪掛り東屋よりすす　九
ちうたを後堂まるて好て　考

秋深きなほ家ごとの　り
一林の大和さまにうき墨り　九
穂ひき弦かゝる初の秋　考
蹄さは雫滴れ我見簾　り
忘ほ子うへすゝるの日　九
七夕を河流う書よ学ハら毫　考
茶碗の酒おうき名さん　り

丸

考

り

丸

考

り

丸

考

り

丸

考

り

丸



右一巻八東花坊いとゝくて
家國よ行脚の時七山重行亭
みく眞りなり

# 夏の部

弱下駄の歩行いく度か葉摘し（イセ）由
野心よ老もうるこうとうるこう（福居）六枳
この苔は鶯よ忘つけく姥薬哉（金沢）青梨
山寺を来れば鶯てもあるか（氷見）杜亮
うるむすの世界や餅のひる時（ナコヤ）以之
鶯や初月師迫ら宿坊三徑
うるむすや筧つるべ古敵（江戸）麥阿

鶯や未だ地ゝ鳴ゝ山　左柳
光陰の矢若よ時や柳の花（山縣）東羽
柳時ゝ鳥の子鳴地川うる（出雲崎）圓石
新なる日を日を人つゝ柳哉（大垣）陸五
鶯の初ゝ鳴や弁も部ゝ鳴　東李
柳うるよ時ゝ鳥ゝ鳴ゝ（秀吉）片石
去も世に時ゝそら秋ゝみとり　李夕
来を時や一二なりむ光の新　一飛

紅葉　色に染まる秋の雨　流石の錦　見せ
ぬ日　片　龍田山　或説　社　竹外
水　一　晩　松
柳　江

左京　酒田　竹
白鷺　菊
花表　鶴
陶

播守の世帯見てゐつてめ邸　國里
白砂を洗ひ〻遊ぶ蓮の葉　壺英
いろはうを見へあげ和いのかり　友松
子鮎の尋まうる他　石杉菅　寛夏
行水や八幡ワるつて見うる　呂九
燕や大和へ切をとられ　東吾
ちる花を鏡よ習ふて皆悔し　杉夫
日新もくらけぬ泥や裏の海　藤袖

お殆ども弾のうき森ばかりなる　千林
瓢雲の弱り体を乗移ろし　一葉
芭のなく不人をを蔵ふ事　去留
庵つよ仙ゑ長笠の幸鰐我　童子
雛の日や歩るかりて桃の花　机官
蕨八金よ時分人を唐美ゑ　庵元
習ひ舞日和りてやいの日　雪仙
打杉も赤川まる雲の白くゑ　英明

晩鐘の こゑ〳〵 所 や 蔵さく〳〵　杉鈴

樽さく側よ柳のすゝ拂　長良　琴風

抱帯し嬢や 雛 ゝ 事　呂杯

沢を出く切 光も 時雨の田 保 あ　梧仙

すけ 笠よ 墨 や 時せく 蓑 庵 里　大垣　仙布

脚〳〵 の 云 家 ゝ 方 屋 や き の 雛　山縣　栗几

面よ き し の 光 り つ め 上 や 下 り 梅 ゞ　不香

菅 蟬 の 雪 を ら ゝ や 山 さ く〳〵　隨風

あ く さ ん 雪 の こ ろ や ち ら 樽　戸　銭平

ほ 雲 も 連 れ よ り も や 雪 の 花　長汀

雛 ち 羽 を 行 し て 面 や 表 ゝ 面　時雪

ち 神 竹 〳〵 苗 代 雛 や 水 こ の 元　若み

蔵 る 事 を 笑 〳〵 蔵 る 樣 ち 面　抱雪

夕 時 や 地 板 流 ゝ 桃 の 茶　湾黄

山 時 よ 自 ゝ か ま る や ゝ ち の ゝ ち 雪　楓江

庵 屋 み ち 算 ゝ ち や 桃 の 花　十二日　麦士

[illegible] 馬六

[illegible] 初櫻 仙風

[illegible] 長盛

[illegible] 桃の酒 杜由

[illegible] 其山

[illegible] 野紅

[illegible] 茂秋

## 夏の部

[illegible] 童平

[illegible] 喜水

[illegible] 海童

[illegible] 楚琉

[illegible] 珈涼

[illegible] 春波

[illegible] 指三

夢や茅の舎の山ゐ老を嘯　庵之

灌仏や雛ちつゝと杜子春　笠松　達治

和の竜や人ち笠着てうむ時　石良　有琴

和の花や堂のおのや木下蔭　出雲湯　浮涯

移の蝋こか神〻嶽の蛍う雨　倭泉

一座皆ゐ〻ゐ中ゐ中ゐ　弁浦

村雨をうつ神〻時ゐ中ゐ　楓伍

所の竜ゐ包むゐ家る小柴垣　夏茅

世中ゐ流ゐ世ゐ人　夏末立　蓮里

立るゐかゝ咲こゐ杜丹ゐ　宗桂

地摘ゐ新ゐこゐ神〻芽子城主　芦錐

夕蛍ゐ一條ゐ白　杜子　露邑

夏書する茅のゐ免ゐ　杜子　佐渡　素雪

傾嫁の神ゐ茅〻ゐ花　サヌキ　華花

獅子ゐ座ゐ杜丹ゐ仏生会　ノト　晩九

人の茅ゐ夕蛍ゐ〻かゝる　井伏　林紅

吟こゑ我も林にいり飛んて行　乙由

神農を下戸よ氣のつく稲の穂　此柱

みなくてゝ花も実もなし秋茶哉　呉井

五月雨を杜鵑花一本よりあり　故酒

菖蒲葛日ゝ浪人も帰ぬ新　吏荊

蕾蕭蕭日ゝつれ〳〵も門遠へ　文可

ゝと火の中よりなるる哉　仲志

泥顔も神代の好逢う早苗哉　和菊

植〳〵ちさる行〳〵ねの子猫ト　左什

笠ぬぎ花も入れよ田うえ哉　玄駿

川水みさりまゝ〳〵ゝ蛍哉　細山

行ゝのちよ〳〵〳〵とほる哉　西奴

麦畑ぬ松ち蛍の出ぬ哉　左言

虹の橋ゝけ〳〵ゝるや夕日雨　眉泉

晴〳〵ゝ人切〳〵ゝ八物の松ゝ　東川

蛾八まゝ抜ゝ抜ゝ園扇哉　呵考

さみだれや畦なき道の中たゆ　江戸　度雲

五月雨よ末の玉川や塚の内　居雲

よしの笠よこたふ八日の雨　湖舟

弓矢よ公男人せるや祝すめ　芙月

南天の冬枯かみやよりあ浜　東雅

山吹紅の帯をかたやタすき　桂枝

茅よ脱まるやや門田の夕ぐみ　袁河

夕顔の宿まるほのぬり枕　大江　東家

夕顔の花あくそ　木槿　琶舟

笠出ち蓑よりきるほつきの　片石

宗の戸も閉ひ粉ぐるまいちと　巴乙

うぐ森のよ色えなさ扇ル　安栄

るうも眺うや合歓の豆下里　里茂

やり水よやひさえ先ち蛍ぐ　来奥

早乙女の笠ち立ぐ　五月雨　少年　正方

三日月ち弾ぐ深川あえ　白扇

花をうつす襟垢西うち用干　金沢　山陳

夕くれよ遠かて庵の屋の面　乎戯

暑さよ星飛よ拾ひ来る扇の角　宗羽　英義

夕ぐもや蟬ちる志ぐれ松の色　英良

柳とる弦ひ合る清水哉　七岡　南嘉

横雲の一刷毛涼屋根若　紫田　桴仙

行あをこなるくらい夕涼　片石

## 蛛の記

鷺一羽　立くれ星の秋　袁坊

蛛も今朝襟裏白一叱敲の雲　京　山只

今鈴ち萩よこうへて尺ち秋の風　鈴浮　響洲

第目よ一筋や穿ち光はひ　城中　枝中

星合ふちくれ乃鷺乃掛　祐九　言童

孫姫や紅の袴よ雲の帯　有中　柳皷

撫孫の君よあまる男七夕　奥は　倚彦

傾城のまもりけよ星ふる（笠松）摩山

織姫の晒場廣しものの川（肥後）乙倍

ふる雨の脊中よりそせ夫婦星（三ノ）分計

七夕や屋ふる雨ふる牛の綱　伊齊

初合やうそ初ふる記文自和（越後）鶴仙

ぬる星ふる孤ふる神あまの河（おさ雪）北溟

秋ふる川や松ふる十二の月ふる　不薄

ふる雨ふる参詣とかすや蛛の糸（江戸）杉調

ふる雨ふる雨もおとり拍ふる（福居）播遠

頃ふる雨ふる雨ふる雨ふる（佐渡）楚璞

道ふる雨ふる雨ふる蓮ふる雨ふる上（京）杜吾

秋ふる雨ふる雨ふる雨ふる（芦）退し

朔ふる雨ふる雨ふる雨ふる　呂柱

色町の雨ふる西瓜の秋ふる雨ふる　孚柱

ふる雨ふる雨ふる蛛の秋ふる雨ふる　童平

秋ふる雨ふる雨ふる雨ふる（カ）千代

稀着く撫なるおとりう角　月石
白のるを秋くあるや緑の花　十知
魂棚や常夏なる花も祖あり迚　民朝
頃へ来く秋を待るや赤蜻蛉　野秋
葉かくぬ人よきけとや時鶏　遠江
吹るぬ萩と桑水深色う角　能登　和莉
秋ちの秋ひとくりや萩芽　越後　雲二
撫物の程やとわきく秋海棠　山縣　右範

名月や弾さく簾屋の揚うきん　乙山
鍋のあ紙かなこ子ん自天うか　月石
家の氣よ出く立るも自天汁　白之
大津絵のひとりぬや鶏頭花　宇兆
聖ふも伊達小路さく鶏頭花　子華
垂糖水時うそのうちいかこう角　素路
やいかに長き船出るいなこうか　長渚
棘をわさくしや竹の京　さん　重行

あるゝ毎なりゝ草の月見るゝ　桃言（独居）

一葉ゝ清名や玉ゝ新の涼　葉圃（彩洋）

林さに踏ゝ入れや地の萩　童牛（江戸）

壁蔵の粉ひおよや色ゝき　斧改

草牧や光金の屋へ灯あるゝ　十子

梶木屋ゝひゝ屋圃月見哉　今柳

蕎板や牡ゝの河ゝ奇かゝ　白卧（ミノ）

いさゝひの体所や　白朱樓（福居）之甫

山ゝ灯ゝ糸や厂の船深里（ミノ）　早禹

きゝ絲の中ゝ梯ゝや光葉　琴左

老婆乃孫を小橋のきゝ　半慈

立山の麓紙紙て杖ゝ　一宇（やとう）

巣ゝ雲の物屋型や深の月　泮虹

菊糸や廉相ゝあゝ四十雀　片石

錦織糸やゝ歩ゝ廉の　地芝

竹塚や踏ゝけて河乃廉ゝ　屋之

紙よりうすく恒の瓢の軍 酒田 南江

華特の詩を詩にかはる三ヶの月 夏雪

代士乃森より形ともなる葉哉 稲砌

きけ特や華をみるの言はし 所石

蛋葉の手もちの一ぱの月 枝翠

つるすとすゝをあちこへ尾花哉 呉柳

包まれ南もや蜂の蛋山屋 江戸 瓢葉

## その後

蔦葉さく中や第よみそさくる 屋元

皮足袋よす色つく樫ふ蔦葉哉 京 花孚

蔦葉こゝ傘さして蔦葉ふる 越後 九蛙

呼角ても山ふる三位を秋の秋 大坂 麦墨

樗葉の蔦よりふる神の蔦 史仙

俎板ゐ寺の塀や納豆汁 福石 山流

何城よ姉こ神こゝにと秋十松 石動 風吹

一羽帰二羽帰ぬる多く　名古屋　巴静

雑の言葉なれる事と時雨哉　貞旭

ゑとり笠ひすまもはぬ帰雁　百枳

引越しと雑治郎の沢寒うか　野有

市心寺咲る日あり初しら花カ　非亮

ゆ篠うけて也祢宜の大根引　松曲

家菴も絵よ書きゆ　ゑ鈴の雪　蘇守

山家哉也秋の残りを蕎く咲ミノ　俤太

洞庭よ若竹伝ふ垂る畑　六芝

雑咲ゆ分けかくして冬杜丹　東巴

見智ふて雪うゝふしみの梅　童平

うゝひすゝとさゝひいせいく帰り花　能登　司魚

飛ちりく目松をきたる鳥うゝ　江戸　弄花

筆自城つゐ反古よする冬籠　琴堂

燭炬も移りと光ゑ十松うゝ　敲氷

新しい色丁おろすうゝけ武　松封

さ面くはら陸中の果やも陸中　麦酒
ゑ僧や價値きる花さう屋　屋枝
初雪や足と米よ蕎ひとり　棲舎
拭ふく板を鏡や窓の入　横琴
風を咲てやへ屋や陸奥の義　方豎
お傘や他力の面よ名誠　斉中　嵐枝
市中ちなる紙酒蕎をに誠子ふ　行石
ちめる茶屋の扇を小麦うる　北而

掃溜や吋面の紙乃盤の甲　五茶
浪柿のちゆけもゆけて蕎茶哉　魯子
寒けしや芙蓉人の陸つる　松亭
連子かゝ姉ちゝ釈ゝや雪丸け　魯草
茶乃雷やつ連なる人の矢束　李山
紙性ちる霖ゆるしう金ろう　物豆
毎足の流んて通る吋面の面　蕎石
寒稲ち白い咲むや雪ゑり屋　百水

地蔵堂の鄰をとりあへず雪かけ　富二川

風の枇杷　枇杷よ蔦てや枯の彦　雲峰　閑枇

河豚賣やお風き方も悔うす　行石

雪を見る目よさへ水仙花　驚秋

人ありと志て住りける屋の雪　砌水

分るは屋根のまるる豆燈ろう　東明

多僻やこる人の兼ねる　風草

鶴竿　城あるれをすに汐相哉　亡人　長湖

象潟や子鳥と共に寄ちあ　日　不玉

さ彦ゆ七合の耳まあまり　舟中　帰的

雪の松もぬきまいなり　和　大坂　捨夕

河豚汁や時雨を誠ある　答ひ　北方　見兎

吳見しこロもなきる　河豚汁　三国　昨蓑

堀川のあるきなる　秋　変　イセ　五蓮

節季ゆの二人　酒屋　兎士

紙子若くて　舎江の衣帽　乙由

妹さひてこされ和尚をなりもの　柳條
鶴ゝ時〇て待ハ和尚なやゝ　童牛
書棚をはけく酒宿の掛物　松調
夕ハもたれと竿ハ高裏　松封
お酒者の振なれ電ハ時雨　竹外
乞合ゝつゝく能田の蓑　差梅
夫風の涙れ暗蓋乃影つゝ　河

その〻れ名ハ呼ゝ流人　花
小倍ゝ細ゝの鶴とハゝゝく　石
蓑のくゝさはとこに無の子　堂
いつとても尽之味線の下角さ　葉
年の壹ゝ迄ゝ乃遠　條
舟ハ今こちゝへ月ハ川ひ　牛
時ゝまれまちと休め鞍の祭　湖

肌寒き借衾よ寺の旅宿所　封

窓を洩れる月に小雪細　氷

花よりも三ツ四ツ星の入梅雨　梅

ゆくえ〳〵に帆てる影美　執筆抱雪

旅とろもいまと枕あり出船より

ひとりゆく風出まきさやけ

きものは思海苔雪ちり大豆

西行と人の花のゝ漕てゆく

ゆゝ竹雪ちり東花光明の

行雲の舊巣稽あ唐人坊社

遊女松子事久しく人一こゝを至
うれを戒めそれを捨てひて
とゝ知るゝを見れてきいつ頃
利潤へ贈りし儀ゝ和歌を
数端としてその國乃人々の
りよ不せまれ給れ利潤事
こゝをとゝむよりのつゝ遠新み

ゝれを添して松ゝ乃ちかの
坊ゝ駿河の芳も知りひゝ神
て給ゝ渡すこゝなはゝく
迎松ての浦乃一言み見て
白紙はみゝ八一書い浦ゝ社
ゝもまゝに藤合と饒娘丸の
書ゝ人ゝ仮ゝん新さ遠と

撰者の雪めりさしかさる花
さそふ山遠加してまさ光澤と
流るる物なり

享保百年仲春日　松栄屋主人

舊門書肆　京寺町二条下ル
橘屋治兵衛板

昭和學園
短大
635
受入
3.44
図書